

雑 感—ドイツ住民になつてみて—

Knoess 道 子

私がここ、フランクフルトに隣接した人口2万ばかりの小さな市に住んで足かけ4年になる。フランクフルトの発展に伴って住宅地化した緑多い新しい町である。

私の息子はフランクフルト市内の病院で生まれたので、生粋のフランクフルターであるパパには及ばないしろ、一応フランクフルターである。これは、フランクフルトのザクセンハウゼン生れの生粋のフランクフルターであり、まあそれを多かれ少かれ誇りにしているパパの意向によるものだった。国際人になるべき(ならざるをえない?)息子のパスポートに、誰も聞いたことのないちいちゃな町の生地が書いてあってもピンとこないではないかというわけだ。

このフランクフルトっ子の誇るザクセンハウゼンは、どの旅行案内書にも載っている有名なところで、メイン川の南に広がるこの地区には沢山の庶民的な雰気の店があって、ここでは Apfelwein (リンゴ酒)、Rippchen (豚のあばら肉) mit Sauerkraut (すっぱいキャベツ)、そして Händkase mit Musik (玉ねぎの入った酢油のドレッシングが Musik なのだ) が名物だ。日本人の感覚でいうと、Rippchen 以外のものはいずれもすっぱいし、においが強くて、この地に降り立ったばかりの日本人が食べてはたして、これはおいしい、と思うかどうか疑問である。もっとも旅行者にとって、日本的でないものは全てドイツ的であり、この感覚は、少くとも好奇心を満足させるという意味でプラスの方向に働くかもしれぬ。

私がここに来てから、“どうです、ドイツは気に入りましたか”と何度聞かれたことだろう。その度に私はきまりきった質問に対するきまりきった答として、“ありがとう、とても”と答えるのだが、本当のことを言うと自分が“この土地を気に入ったか”どうかなんて一度も考えてみたことなんかないのだ。気に入らないからって簡単にどこかに移転するわけにはいかないのだし、ここで私が居心地よくすごしているのは、“亭主がまあ困らない程度にかせいでくれる”からで、ドイツがいい国だからばかりではない。他のどこの国とも同じように、富める者も貧しい者も、いいことも悪いことも含めたドイツという国の中で私の生活の場を築いた今、ドイツという漠とした観念に対し好き嫌いをいうのはむづかしい。

ドイツの具体的な美点はたくさんあげられる。ドイツの都市、特に小都市はそれぞれが美しく、日本のようにどこもかしこも人がごちゃごちゃいないし、緑は多いし、住居も一般的には雲泥の差で良いし、道路も良いし、そして食べ物も、種類の多いハム・ソーセージ類、色とりどりのケーキ類、と一見すてきなことばかりだが、このためにドイツびいきになるかどうかは別の問題だ。それでも、私があえて、私はドイツにのっぴきならぬ好意をもっている、という時の理由の半分は、私の夫がドイツ人であるということによるだろう。全く、好みなんて全く個人的な利害関係から発していることが多いのだ(ちなみに、私のドイツでの親戚、友人達は、日本のことをたいして知らないにもかかわらず、大の日本びいきである)。

そして私とドイツの結びつきの大きな一要素であるのが、2才9カ月になるわが息子である。女の子のようにおしゃべりで、1日中相手のあるなしにかかわらず歌い、かつしゃべっているが、これはほとんどドイツ語ばかり。我々は1日中顔をつきあわせていながら、母親は日本語で、子供はドイツ語で話をするというちょっとへんな母子である。彼は私の話す日本語もよく理解するが、自分ではえらくかたくなにドイツ語ばかりしゃべるのはおもしろい。もっとも母親が日本語で聞くと子供はドイツ語で答える、というのはドイツに住んでいる以上めずらしいことではないだろう。こちらに住んでいる日本人家庭の幼稚園前の小さな子供でさえ、どこからどう覚えるのかけっこうドイツ語を連発するのを見ると、本当に、子供は社会的なもの、言葉は社会的なものだ、と思う。

まったく子供に限らず大人についても、とりまく環境の影響は遮断できない。時々、私は思わざるをえない。大げさに聞えるかもしれないが、ドイツの空気にはドイツの文化がただよっている、と。(どこの土地でも)その空気を吸うだけで、その文化を吸い込んでしまうのだ。この感じ、おわかりいただけるだろうか。

そして長年ドイツの空気を吸い続ければだんだんとこれがドイツの空気であることに気がつきにくくなっていくにちがいない。よきにつけ悪しきにつけ、何かと日本と比べてドイツを観察していた最初の頃の私も、今はもうあまり日本と比較することなく、ドイツでの事象を直接的にうけとるようになった。はたして、良いことなのか悪いことなのか。

(19回生)